

Title	中國佛教彫刻史研究(松原三郎著, 吉川弘文館刊)
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.34, No.2 (1961. 12) ,p.130(250)- 133(253)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19611200-0130">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19611200-0130</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

### 中國佛教彫刻史研究

(松原三郎著)  
吉川弘文館刊

松原三郎氏は、昭和二十九年ごろから、北朝、および隋、唐の佛教彫刻に關する論考を、國華、美術研究、佛教藝術、美術史などの諸誌にしばしば發表してこられた。いま、これらの諸篇がすべて書きあらためられ、あらたに數篇が加えられて、計十篇—附篇一を添える—、これに二百ほどの圖版—更に挿圖約二百を添付—を收めて、「中國佛教彫刻史研究」が刊行された。史上の諸問題を、とくに金銅佛と石佛—石窟造像は除く—について各個に論じつつ、その盛期、北魏から五代までを概観されたものである。

この時代の彫刻を論じたものは、從來、けつして少くなかつた。しかし、その大半は、石窟の造像に關するものであり、そうでなければ、個々の像にかぎられがちで、いわば斷片的であつた。それは、いうまでもなくこのような單獨像の遺品が少いことと、しかもそれが個人の所藏者や海外に分散されて、綜合

的に研究しにくい状態におかれているからである。

著者は、この金銅佛、單獨の石佛をできるかぎり網羅して實見し、とくに銘文をくわしく調査することに努められた。また近年の中國の發掘の報告にも、充分に意をはらわれている。そして、その結果にもとづいて、きわめて具體的に様式論を展開される。豊富な圖版の收録は、そのためである。なお資料の不足に對しては、とくに舊稿では、この基本的な態度に文献的研究を加えられて、地域性や信仰の事情、たとえば道佛融合などの問題が推論されている。ただこの書では、これらの結論がかなり要約されていて、ただちには理解しがたい場合もある。

以下、各論について、その問題點を探つてみよう。

#### 一、北魏太和金銅佛の諸問題

太和年間(四七七—四九九)の在銘の十八像を列舉して、その形式、様式、銘文から、製作地、特色、系譜などを考察する。太和金銅佛は、前代の和平(四六〇—六五)、皇興(四六七—七〇)、延興(四七一—七五)年間の諸像とおなじ系列のうえにあり、形式も多様で、様式にも特色が不明瞭であるが、前半期の作品は、力強い火焰などに生氣がみなぎり、後半期のものは、形式化してきている。製作地は、銘文からは、ほとんどが河北山東方面と推定され、一群のものは、様式から、陝西、甘肅地方が考えられる。

#### 二、北魏鄜縣様式石彫

郵縣様式の石彫は、六世紀前半、とくに正始（五〇四—）から永安（一五二九）ごろ、龍門様式の流行のかげに、陝西の奥地で行われた。多く赤みがかつた砂岩で、原始的な彫法が明らかにそれと特徴を示す様式である。この石彫は、皇興（四六七—七〇）、太和（四七七—九九）以来の陝西一帯の石像を母胎として生まれていて、三つのグループに分かたれるが、その石質の相違が、郵縣から周邊の地方に製作地域が擴がつたことを示す。そして、この諸像には「道民」の文字、龍に乗る天神、日月をあらわす圓盤様の文様など、道教像としての特徴が認められるものがあり、太武帝の廢佛下に、道教的假装のもとに、あるいは道佛融合というかたちで、佛教の隠し信仰が行われていたのではないかと推察される。

### 三、北魏正光様式の金銅佛

メトロポリタン美術館に、北魏正光五年（五二四）の金銅彌勒佛がある。全高七七センチ、脇侍、舟形光背、その飛天、臺座、力士、獅子などの莊嚴具をほぼ完備し、臺座背面に、正光五年九月、河北定州中山縣新市縣のものが、亡兒供養のために彌勒像をつくつた、という銘がある。出土は、一九二四年、河北省正定郊外である。

この像は、細部にいたるまで整然とシンメトリーに統一され、衣の裾などに鋭いはりをもつて、嚴正端麗、中國金銅佛中の逸品である。そして、この嚴格な統一性と緊張したはりとは、

いくつかの正光銘の像に共通して、正光様式を構成し、そのすぐれた技巧と完成された形式美が、北魏造像の頂點を示す。

正光様式は、延昌（五一二—一五）ごろを境に、太和佛から脱して纏まつてきたもので、盛期をへて、東魏から、ある意味では北齊、隋代までつながる。とくに河北では、この時代を通じて、彌勒と觀音の信仰が隆盛をきわめ、造像もまた、ふたたび漢文化の傳統を受けついで、盛んに行われたのであろう。

### 四、金銅二佛並坐考—特に北魏代を主として—

北魏代には、法華經の信仰が盛んになり、民衆のあいだでも、河北を中心に、小金銅の二佛並坐像がしきりにつくられた。しかし、これらの像には名品が少く、數多くつくられて類型化した作品の集團が、時代の流れを示す。そして、太和、景明（五〇〇—〇三）年間のものには、「多寶」、または「多保」の銘がみられるが、そのあと時代の下降とともに、單に「像」となつて、本來の釋迦、多寶二尊の意義を失つてきている。この傾向は、造像が北齊、隋と引きつづいて傳統的に行われると、さらに強まった。

### 五、東魏彫刻論

東魏の彫刻は、地域的にも時代的にも、多様性に富む。たとえば地域的には、概して河北のものは、北魏の正光様式の傳統を強く受けついでいるのに、河南方面のものは、これに反撥し、穩やかな丸味のあるつくりや、伸びのある優雅な文様をもつて

情緒的である。すなわち、舊來の嚴正な冷嚴な作風を保ちながらも、體軀のプロポーションが變化し、裝飾化が進んで、新しい北齊様式へのまるやかな豊かさを生みだしてきているのである。

また、止利式の飛鳥佛に、東魏像と同系のものがある。法隆寺の釋迦三尊は、東魏の多様性を、その母胎たる北魏の傳統にもどつて、嚴格な象徴主義に整理して受けいれている。

#### 六、西魏北周佛の一考察

西魏、北周佛の遺品は數少く、とくに金銅像にはきわめて乏しい。が、この僅少例から推して、石像は、簡素ではあるが重厚な作風をもち、北魏後半期の様式を維持している。金銅像も、これとかなり密接で、北魏末から西魏、さらに北周への一應の系譜が考えられるであらう。

#### 七、北齊の定県様式白玉像―特に半跏思惟像について―

定県は、白玉石産地の中心であり、また、北魏の廢佛や北魏末から東西魏への争亂を避けて、佛教の榮えた地方である。ここを中心として、北齊から隋にかけて、地方色の濃い庶民的な白玉石佛がつくられた。これには、三尊形式のものが多く、初期の作品は、正面觀が重視されて平面的であり、北齊のものから、やや側面の美も重んぜられ、壁面の束縛から解放されて、立體化の傾向をみせる。綜じて、丸味、彫りなどに齒ぎれが悪くあらう感じがして、北魏末以來の様式的に古い傳統と、隋代の新しい様式成立の氣運とはさまれた、過渡的な様式とみられ

る。

#### 八、齊隋代金銅像の一考察―魏齊様の金銅觀音菩薩立像について―

北齊の金銅佛は、丸味を帯びた様式の進展はあるものの、やはり北魏以來の様式の繼承で、迫力はない。隋代には、造像の隆盛をみ、觀音の小像も多く、これらは、寶珠形の頭光や瓔珞などの新しい傾向をもち、簡略化された様式の退化を示すが、齊隋とつながつて、なお北魏の古様を残すのである。そしてそれが、北齊造像の性格をかたちづくる重要な要素となつたようである。

この古様の残存、そして古様をふまえての新しい性格の成立は、わが飛鳥様式の理解にも重要な意義をもつもので、止利派残存といわれる諸像の直接の祖型となつたといえるであらう。たとえば舊御物四十八體佛の辛亥年銘の金銅菩薩立像は、齊隋の諸金銅像と比較すれば、齊末隋初の様式に相當し、その辛亥が六五一年（白雉二年）であることを理解できる。

#### 隋唐金銅佛の系譜

隋から唐への様式の變遷は、隋唐金銅傳がわが國に少く、さらに銘文に乏しくて、理解が困難なので、その姿態の柔軟性の變化を追いつつ、在銘の石佛と比較對照して、系譜を辿る。

#### 九、唐代玄宗期造像考―石彫と木彫―

唐代の佛像彫刻は、玄宗期に、金銅佛鑄造の禁令をうけ、寫實主義にもいきづまつて、衰退した。しかし、石窟造像は四川

に移つて繼承され、河北では、代つて白大理石像がふたたびつくられるようになった。大理石像には、その量感の豊かさで様式のいきづまりを打ちやぶり、また技法のうえで木彫とおなじ性格から、この期の、とくに一木彫を支配するものがある。唐招提寺、大安寺様の木彫もそうで、八世紀なかばの唐で、新しい一生面が開かれて生まれてきたものである。

#### 十、五代造像考

唐代最末期の諸像は、體軀全體の感じは唐風であるが、部分的には唐の寫實主義をぬけだしてきている。五代にはいると、造像が減り、記銘の慣習が衰えるので、その僅少例から推すはかはない。前半期のものは、鐵佛の出現のような傾向があつても、なお新しい時代様式の成立はみられない。これが後晉天福七年（九四二）石佛になると、木彫の手法をうつしたように繊細で、宋初の浮彫に通じ、新しい時代の造形を示すのである。それはまた、保守的な河北に對して、江南、あるいは四川という地域性も考えるべきであろう。すなわち五代彫刻は、形式的にも資材の面にも多様であるが、まだそれが統一されて形式化するにはいたらないので、生氣に満ちている。要するに、唐宋の過渡期なのである。

#### (附) 道教像論考—齊周の道教像について—

齊周の道教像は、衣冠をつけ、鬚髯をはやし、袂軾を前にして塵尾と思われるものを手にしている。この形式は、東西魏の代から齊周の初期にかけて、しだいに整つてきたもので、その

一應の完成は、北周のなかばごろと考える。

以上のほかに、緒言では、三、四世紀ごろの佛像の創始期の問題にも觸れている。また「隋唐金銅佛の系譜」を挿入して、獨立した各論のあいだの、隋から盛唐期にかけての空白を埋められた。したがつて、北魏から五代宋初にいたる佛像彫刻の系譜が、明確に提示された。この成果と、ほぼ網羅して収録された圖版、および銘文とは、われわれの六朝史研究にも、資するところ大なるものがある。

しかし、ここで扱われた金銅佛と單獨の石佛は、美術史上の様式には敏感であるが、移動しやすく、小像も少なく、銘文の形式、字数にかぎりがあつて願文が簡單であることなどのために、地方佛教の状況、信仰の地域性、教義上の問題、さらには數度の廢佛を背景とするこの時代の佛教史一般にたいしては、さほどの反應を示していない。この書は、そのために、様式論に關しては、豊富な圖版を驅使して、あくまで實證的な態度をつらぬいているのに、歴史的な問題については、いわば推論の域をでないのである。

なお、圖版の編集についてであるが、それが非常に豊富で、まれにみる豪華本であるだけに、資料篇として、または圖録として、別冊にすべきであつた。論文の内容と對比してよく理解するためにも、あるいは今後の利用に資するためにも、それは望まれるであろうし、配列にも、なお一考の余地がある。

(尾崎 康)